

重点ニュース：中国の総合戦略早期警戒計画

漢和防務評論 20161230 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国は、弾道ミサイル対処のため、大規模な早期警戒体系を構築しようとしています。

中心となるのは早期警戒衛星ですが未だ開発途中です。漢和の記事では中国の戦略情報筋によると、5年程度で実戦配備されるとのことです。

そのほかに早期警戒気球の開発が進行中です。米ソもかつて開発に着手しましたが、実用化に至っていません。気球にレーダーを搭載し、敵のミサイル発射を探知する方法ですが、技術がむつかしく現在は技術的難関に突き当たっているとのこと。この気球はステルス性が高いとのことですが、この辺が理解できません。

KDR 平可夫東京、JOHN CHANG 珠海特電：

信頼できる戦略情報筋が KDR に語ったところによると、中国の聯合参謀部は、総参謀部時代から”総合戦略早期警戒計画”の策定を開始した。この計画は聯合参謀部時代になって加速を始めた。その構想は、極めて野心的で、計画案には、戦略弾道ミサイル早期警戒衛星、さらに大型の早期警戒管制機、各種大型早期警戒フェーズド・アレイ・レーダー、新たな赤外線・画像偵察衛星及び戦略早期警戒気球の開発が含まれている。

消息筋は：聯合参謀部は、最近制定した6大軍事装備開発計画の中で、”戦略早期警戒”を最優先とした、と述べた。これは西側の刊行物が初めて入手した最も権威ある中国軍事装備開発計画の内容である。戦略弾道ミサイル早期警戒衛星は、現在開発計画の基本が完成し、今後5年で実戦配備段階に入る。このほか、航天第5研究院が開発した新時代の滞空時間10年以上のデジタル画像偵察衛星は、解析度が0.3mに達した。”尖兵”系列の衛星はすでに部隊に装備された。少なくとも毎日2回は台湾上空を通過し、画像偵察を行っている、と。

新たな大型戦略早期警戒機は現在開発中で、計画ではY-20を土台として採用する。KDRは、数ヶ月前にすでに細部を紹介している。これは国際メディアとしては最も早い報道である。9月末、中国の軍事専門家は、国営テレビでKJ-3000型早期警戒機の開発計画の存在を認めた。しかしKDRはY-20の技術が未成熟であると見ており、もしKJ-3000の計画が本当に存在するならば、部隊装備までには相当時間がかかると思われる。

KDRは、戦略早期警戒気球の開発を含めて”総合戦略早期警戒計画”の細部を知った。

KDR：戦略早期警戒気球はどこが重要なのか？

中国戦略情報筋：あなたは気球を馬鹿にしているのか？この技術は相当高級な

技術であり、現在最大の難関に差し掛かっている。これは、総参謀部の総合戦略早期警戒計画の核心部分である。米、ソは当時早期警戒気球開発に取り組んでいた。相当高レベルの科学技術に属する。主な想定はヘリウムガスを利用した大型の気球を滞空させ、敵の最前沿で戦略早期警戒能力を形成する、と。

KDR は、2000 年代初期、モスクワの戦略情報筋から、中国とロシアが協力して大型軍用気球技術を開発中であることを知った。協力計画の重要な部分は、中国がロシアから大型ヘリウムガス気球の生産技術を導入することにあった。しかし **KDR** の知る範囲ではこの計画は未だ成功しておらず、気球は試験飛行の過程にあり、多くの技術問題が存在することだ。**KDR** は、当時の漢和防務評論の「毎日動態摘要」で報道した。

戦略早期警戒気球は偵察衛星に比べ、技術が複雑なのか？開発は難しいのか？

これに対して戦略情報筋は：確かにむづかしい。中国がデジタル偵察衛星開発に要した期間は長かった。大型ヘリウムガス気球の開発を開始した時期は早かったにもかかわらず、未だに多くの技術的難関を突破できない、とのべた。

情報筋は：聯合参謀部の”総合戦略早期警戒計画”は、長距離早期警戒フェーズド・アレイ・レーダー、赤外線カメラ、レーザーセンサーを搭載する大型早期警戒気球を開発しようとしており、弾道ミサイル早期警戒、及び航空早期警戒能力を持たせる。大型フェーズド・アレイ・レーダーを装備する戦略早期警戒気球は、低空の戦闘機目標であれば目標探知距離が 300KM 以上に達し、同時に一定の対地上装備の偵察能力がある。同時に戦略早期警戒気球と戦略早期警戒機を連携させると、戦略早期警戒機が巡航していない時でも戦略早期警戒気球がまず最初に目標を発見し戦略早期警戒を行う。その後、戦略、戦術早期警戒機が行動する。

これに対する **KDR** の疑問は次の通り：低空探知レーダーの機能がある早期警戒気球を装備することは理解できる。しかし大型ヘリウム気球に高精度の赤外線カメラを取付け、敵の戦略弾道ミサイルを探知目標として、初期発射段階において、早期警戒を実施するということはどう解釈したらよいのか？特に米国の **ICBM** に対しては、初期探知は衛星のような高い高度が必要ではないのか？

これに対して中国戦略情報筋は初めて次のように述べた：戦略弾道ミサイル早期警戒気球を開発する目的は、インド、北朝鮮、台湾などが保有する、中・短距離弾道ミサイル及び隣国地区に対処するためである。すなわち国境に配備し、敵が一旦、中・短距離弾道ミサイルを発射したとき、早期警戒気球を利用して探知するのである。同時に戦略ミサイル早期警戒衛星と連携させ、さらに正確な情報を得るようにする、と述べた。

北朝鮮がすでに中国の戦略仮想敵国であり、しかも北朝鮮向けに戦略弾道ミサイルを配備しようとしていることを **KDR** はここで初めて知った。そうであるにしても、どこに配備するのか？**KDR** が知り得たことは：総合計画の実施案によると、1. 首都地区、2. 中朝国境、3. 中印国境、4. 台湾海峡、5. 三峡地区、であり、それぞれに 1 個戦略気球群を配備する。

いわゆる 1 個戦略気球群とは、1 個の早期警戒気球だけでなく、いくつかの地区を”雙体制”、”縦深体制戦略気球群”と称し、2 乃至 3 個の戦略気球で構成され

る。この計画から見ると、中国の聯合参謀部は、三峡地区の戦略早期警戒体制をいかに重視しているかがわかる。この点は理解できる。KDR は、少なくとも 3 個の国家が大規模な対華作戦計画を制定しているとする。その計画には、三峡地区に対する細部にわたる決定的な攻撃計画が含まれている。いくつかの戦略進攻計画は、国家政策策定に極めて大きな影響力を持つ民間のシンクタンクが関与しており、極めて具体的である。一部の研究は政府の資金援助を受けている。KDR は、このような対華作戦計画の内容の一部（非機密部分、機密部分、KDR が従来書かなかった、あらゆる国家を対象として）を逐次公開していく。

中国の戦略早期警戒気球について、残りの部分は、いつ配備するか？である。本誌は、未だ具体的配備時期は知らない。しかし KJ-3000 型戦略早期警戒機の開発状況、戦略弾道ミサイル早期警戒衛星の開発期間から見ると、KDR の推計では、聯合参謀部の総合早期警戒計画が完成するのはおおよそ 7 乃至 10 年後である。

KDR の疑問は：戦略早期警戒気球の生存性である。特に中印国境や朝鮮半島の国境地区等に配備された気球である。早期警戒気球は当然移動可能である。しかしスピードは極めて緩慢で秒速 6M 以下である。生存性は戦略早期警戒機を超えることができるか？

たとえ中印国境、中朝国境から 300 乃至 500KM の場所に配備したとしても、依然として SU-30MKI 戦闘機から致命的攻撃を受ける。退避はできない。

これに対して中国の専門家は：大型戦略早期警戒気球のステルス性能は金属製の戦闘機や早期警戒機よりも高く、敵国の大型レーダーも戦略早期警戒気球を発見するのは困難である、と述べた。この技術的結論が、中国に早期警戒気球配備を決心させた大きな理由であろう。

以上